

第I部

エスニシティと国家統合

クリスティアン・カランブーのなかのフランス、 フランスのなかのクリスティアン・カランブー ——フットボールが紡ぐ「民族」の記憶とアイデンティティをめぐって——

キーワード：サッカー、精神の脱植民地化、植民地主義、ナショナリズム、ポスト・コロニアリズム、アイデンティティ

佐 藤 幸 男*

Christian Karembou and France: Kanak Memory and Identity in Football

Key Words: football, the decolonization of the mind, colonialism, nationalism, post-colonial, identity

SATO Yukio

We live in an era of ever-increasing global interconnectedness of people, places, capital, and goods. This paper aims to examine the global transformation of national identity in football with Christian Karembou of New Caledonia.

The paper is in four parts. The first assesses interactions of politics and football games; in the second, examines the claim that the current issues are global-colonial relations. The third focus on Kanak memory and identity in Christian Karembou. The fourth part describes the relationship between France and New Caledonia under postcolonial perspectives.

* 富山大学大学院教育学研究科

- | | |
|--------------------------------------|------------------------------|
| 1. はじめに | 5. クリステイアン・カランブーの記憶とアイデンティティ |
| 2. ワールドカップ・サッカーの政治学 | |
| 3. フランス・ナショナリズムのパラドックス | 6. おわりに——オセアニア・ポストコロニアリズムの模索 |
| 4. フランス植民地主義とニューカレドニアのナショナル・アイデンティティ | |

われわれには神話や伝統がある。それに固執するのではなく、未来に向かってアイデンティティを築かねばならない。さまざまな文化、さまざまな人びとと接する〈場〉を通じて未来を切り拓いていくことで、われわれのアイデンティティを発見することができるのである [Jean-Marie Tjibaou 1998: 4-5]。

1. はじめに

2002年6月、アジアではじめて開催された日韓共催ワールドカップ・サッカーはスポーツがもっている政治性を人びとに鮮明に刻印するイベントとなった。このスペクタクルは人びとを熱狂させるだけでなく、なによりも世界的規模の国家を単位にした「優勝」をめぐる試合であったからこそ、擬制としての「国家」を再審させずにはおかないのである。

ブラジルの5度目の優勝で幕を閉じた今大会で、最初に大きな衝撃を受けたのは前回の覇者フランスの不調ではなかった。未曾有の経済危機に魔われたアルゼンチンの退潮、ヨーロッパ出身監督下での日本、韓国、中国といったアジア勢の躍進など枚挙にいとまがないが、なによりも衆目は、開幕でフランスを打ち破ったセネガルが準々決勝にまで勝ち上がったことで「被植民地国による宗主国への勝利」、あるいは旧宗主国にたいする勝利が40年以上前の政治的独立以上に人びとに「国民」を意識されたことにある。それは、国家や民族文化を日常的に国民に「費消」されるしくみがスポーツに内在し、すでに新しい政治的動員力をもつようになったことで、ワールドカップ・サッカーは国家の政治的統制力に取って代わるほどではないにしても、ある種のパワーをなかば渾然たるかたちで形成してみせたのである。

そればかりではない。サッカーは世界を覗く「レンズ」として格好な材料を提供してくれる。たとえば、FIFAの資料がしめすように、競技人口が2億4238万人(世

佐藤 クリスティアン・カランプーのなかのフランス、フランスのなかのクリスティアン・カランプー
界人口60億の地球人の25人に1人がサッカーをしている計算になる)を数え、かつ「貧者のスポーツ」とされるサッカーほどグローバルな問題を内在させるものはほかにない。また、98年大会では世界で延べ370億人がテレビに釘づけされたが、今回はそれをはるかに越えて500億人(推計)がテレビで観戦するほどの巨大市場を仕立てあげたのである。とくに、90年代に台頭した衛星放送は「グローバル」「リアルタイム」という特性を最大限に生かすソフトとして商品価値を高め、このスポーツ大会を世界商品に練り上げたとうどじに、国際放映権料を押し上げてきた[Wright 1999: 268-273]。いいかえれば、19世紀のナショナリズム、20世紀の資本主義と21世紀のグローバリゼーションという世界を動かす理念がこのスポーツに凝縮しているといっても過言ではない。しかも、激しく揺れ動く世界の姿を映しだすワールドカップ・サッカーは、ナショナリズムと植民地主義、民族性と市民権、自民族中心主義とグローバリゼーション(あるいは「帝国」とのあいだに横たわる調和しがたいパラドックスを表象している。

本稿は、表題にしめされているように、第三世界の後進性と劣等性のステイグマを仏領ニューカレドニアに参照し、サッカーという〈場〉において提起された「精神の脱植民地化」の胎動を予兆させたニューカレドニア出身でフランス・ナショナルチームのメンバーであるクリスティアン・カランプーというプレーヤーに焦点をあてながら解き明かそうとするものである。フランス・ナショナルチームとカランプーとの関係性を読み解くとき、植民地主義、人種主義、ナショナリズム、ポスト・コロニアリズム、ディアスポラといった広範な問題群がそこから浮上し、興味の絶えない考察材料を提供しつづけてくれる。なぜなら、みずからの出自であるニューカレドニアを顕揚し、「非フランス人」宣言をしながらフランス「代表」でありつづけているクリスティアン・カランプーを、サッカー選手というカテゴリーで探すかぎりにおいてこれほどの「政治的」プレーヤーはないからである¹⁾[陣野 1998b: 16]。

1) 右のサイドバックであるクリスティアン・カランプーの勇姿を日本で見ることができたのは、2001年6月10日開催された2002ワールドカップのプレ大会、コンフェデレーションズカップ最終日、日本対フランス戦(横浜国際総合競技場)であった。本大会である日韓ワールドカップ・フランス代表メンバーにはケガを負って呼ばれることはなかった。したがって、本稿での考察も1998年フランス大会を中心にすすめるをえない。

2. ワールドカップ・サッカーの政治学

サッカーをひとつの「部族」にたとえたのはイギリスの動物行動学者デズモンド・モリスであるとされる。かれは、何億という地球上の人びとがテレビの画面に映しだされるワールドカップの決勝戦にいっせいに集中する光景を、球技を神聖視する一部族がかれらの重要な宗教儀礼を挙行している姿になぞることができるかと夢想したことから、サッカー・トライブとたくみに表現してみせたのである。今福が指摘するように、サッカーは「部族」にとっての儀礼的な狩猟行為とみなすことができよう。役割分担を決め、獲物を丹念に追いかけて、槍を手に集団で大きな獲物をしとめる原始的な狩猟の組織的共同性がサッカーの原型となっている。じじつ、現代サッカーの本質的に激しい戦闘としての側面がつけねにはらまれており、敵と味方のあいだの戦闘であるとうじに、より象徴的・宇宙論的レヴェルでは、さまざまに対立する人間的価値や制度そのものの内的かつ弁証法的な紛争でもあったからこそ、サッカーがつけねに象徴的な抗争のなかから新しい人間の生き方や価値観を方向づける役割をはたしてきた [今福 1997: 114-130]。

サッカーの歴史はそれを物語っている。なによりもまずサッカーが秩序と混沌との戦いからはじまったといえる。それは14世紀以降イングランドにおいてサッカーの原型となった蹴球がしばしば死者をだすほどの無秩序で暴力的な球技であったからだ。いいかえれば、国家や教会に代表される「規律」や「制度」にたいする民衆的な反乱としてはじまり、制度の側につくエリートと階級的に抑圧された労働者との戦いの意味をもつにいたったからでもある。19世紀、パブリック・スクールで公式球技としてフットボールのルールが確立されていく過程で、ふたつの流派に分裂していく。ひとつは手の使用を許容するラグビー校などの「ラグビー・ユニオン」派であり、いまひとつは手の使用を禁じたウェストミンスター校を中心とする「フットボール・アソシエーション」(のちにアソシエーションが短縮されてサッカーと略される)派である [ヴァール 2002]。

かくして1886年、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの4協会からなるイギリス国際評議会が設立されるにいたる。また、1904年イギリス以外の欧州7ヶ国で設立される国際サッカー連盟も、イギリス4協会を独立国並みに遇するのはこうして歴史的経緯に由来していることも明らかであろう。

周知のように、19世紀のイギリスで近代スポーツとして定着し、帝国主義の時代に世界に広がったサッカー文化は、当時のヨーロッパの植民地的な展開とみごとに

佐藤 クリスマン・カランブーのなかのフランス、フランスのなかのクリスマン・カランブー
重なりあい、近代国家形成にむけて国民を動員する統合原理として利用され、植民地化のもとでアフリカや中南米では人為的に引かれた国境線に合わせて「国民意識」をつくりだす媒体ともなったからこそ、規律を重視する近代スポーツの帝国主義的な性格への無意識な反発が芽生えもしたのである。とりわけ、第三世界にあってはサッカーはキリスト教の布教のために呼び物として利用され、大英帝国の商品が持ち込まれる港から世界各地にサッカーが普及していったのである。

サッカーというスポーツが列強による帝国主義的な世界支配と不可分であったことは例証に事欠かない [Darby 2002; Dimeo 2002: 72-90] が、なかでも W・ロウと V・シェリングの『記憶と近代』はブラジル・サッカーの醍醐味を活写した好著である [ロウ／シェリング 1999: 219-222]。それは、20世紀にはいつから白人の上流階級のスポーツであったサッカーが黒人に解放され、奴隷制と人種差別との長い闘争のなかで鍛え上げられた戦術と民衆の心性を見事に描きだしている。それによれば、なによりもかつての植民地支配関係をゲームのなかで転倒させる可能性がサッカーに組み込まれていたからこそ、貧しさにあえぎながらもストリート・サッカーで個人技を研ぐ南米やアフリカの少年が一気に世界の表舞台に躍り出る夢を育んだからである。そればかりか、1970年代、ブラジルの軍事政権はワールドカップ優勝を国威発揚の絶好の機会ととらえて政治的に利用し、「近代化」による急速な経済成長とどうじに、軍政下で抑圧された民衆の叫びを圧殺する効果をもたせた。軍事政権のサッカーの政治的利用というコンテクストにおいては、軍事政権それ自体にたいする対抗的ヘゲモニーの拠点として編成されることでサッカーが新たな社会運動を創出させる契機ともなるのである [向山 2002]。

このように、政治とスポーツの関係はしばしば主従関係に喩えられ、スポーツは社会的統合の道具とみなされ、政治宣伝の効果的な媒体として利用され、あるときには現代の「民衆の阿片」と揶揄され、耐え難い現実を隠蔽するイデオロギー装置として機能すると批判される。とくに、フットボールゲームはしばしば「戦争」の代替行為として表現され、愛国心やナショナリズムを動員する装置として語られることが多い。しかし、スポーツはたんに政治への従属につながるだけではない。ときとして政治にたいする敵対性を含んだ激しい情念を包み込む闘争の関係性を保持し、両者の関係に矛盾や緊張をはらんで政治変革の気運を高揚させるのもじじつである。

そればかりか、このボール蹴りという競技の大衆性、選手全員が参加する平等性、ルールと技術の単純性を特性とするサッカーは、被植民地社会においてはとくに、

「国民」の境界を再定義し、関係性の接合する「場」を提供し²⁾、一体感や団結心を醸成し、ナショナル・アイデンティティ形成の下支えとなり、社会階層間のモビリティ（移動性）の拡大を助長することで世俗的な「宗教」（すなわち、社会の生命を鼓舞し、激励し高揚させる熱学的な力をもつことで宗教と唱えられる）であることから、「ナショナリズムを食べて生きるスポーツ」（鄭夢準・韓国サッカー協会会長談）ともなるのである。

この植民地的な痕跡を忍ばせたスポーツであるサッカーは、列強による世界制覇として繰り広げられるのがワールドカップである。これまでワールドカップで優勝を経験した国はブラジルとアルゼンチンの南米勢とイタリア、ドイツ、そしてフランスをはじめとするいくつかの欧州「サッカー列強」に限定されている。こうした「サッカー帝国主義」が20世紀のフットボールを制してきたなかで、脱国家的な波が押し寄せるのは95年の「ボスマン裁定」による移籍の自由による外国人枠の撤廃である [陣野 2002a: 90-93]。このボスマン裁定以後、多国籍クラブがうまれただけでなく、サッカー選手の多国籍化による民族の離散（ディアスポラ）と呼びうる流動的な移動形態が顕著となったことで、世界規模のサッカーの勢力均衡図にあたかも地球規模の政治的な勢力均衡の変容に匹敵するほどの変化を迫っていると、H・キッシンジャーは指摘している [キッシンジャー 2002]。

FIFAの組織態様をまずみておこう。1904年欧州7ヶ国で設立されたFIFA（国際サッカー連盟）は、現在加盟数204ヶ国・地域（2002年7月現在国連加盟国数を凌ぐ）を越え、その下部にアジア連盟（AFC）、アフリカ連盟（CAF）、北中米カリブ連盟（CONCACAF）、南米連盟（CONMEBOL）、オセアニア連盟（OFC）、欧州連盟（UEFA）の6つの大陸組織を要し、そのもとに各国協会からなる世界最大の競技統括組織である。FIFAワールドカップは、1930年ウルグアイで開催されて以来、4年に1回オリンピックの中間年に開催されるが、そのほか欧州版ワールドカップである欧州選手権をはじめとする大陸別選手権やワールドカップのプレ大会であるコンフェデレーションズカップなどをFIFAは統括し、かつビッグビジネスを展開してきた。いわば、ワールドカップの規模は世界におけるサッカーの発展と並行して拡大し、2002年大会には198ヶ国がエントリーし、32の出場枠を争い、1ヶ月間の長期にわたる本大会が開かれるほどになった。そのいっぽうではワール

2) 人種差別や他民族の排斥は差異を与件とするのではなく、等質の場に無理やりくさびを打ち込んで差異化を謀る運動であるからこそ、同一性と差異化とを通じて絶え間なく維持される運動あるいはプロセスとして民族や文化をとらえることが肝要となる [小坂井 2000: 222]。

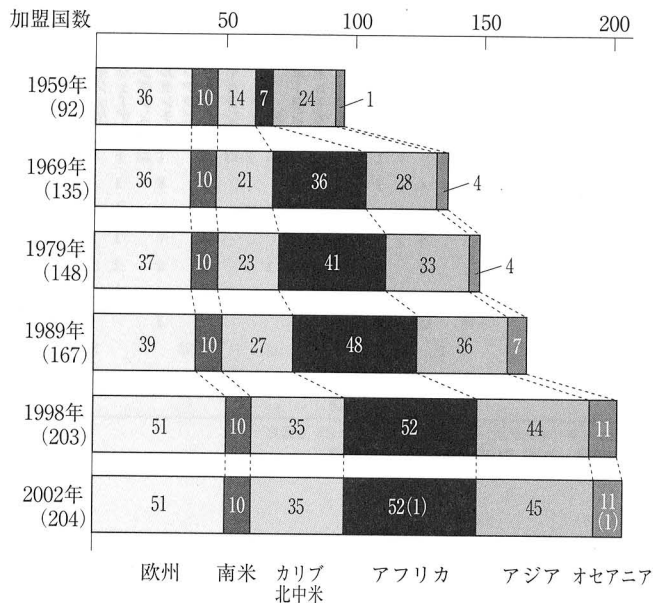
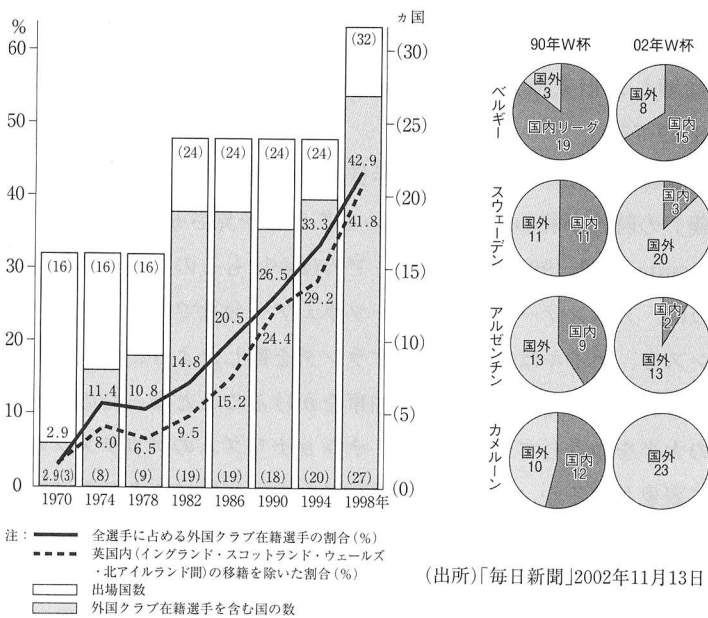


図1 国際サッカー連盟加盟数の推移

(資料) SPIRITS特別編集版「2002ワールドカップ32ヶ国・データブック」ネコ・パブリッシング、2002年および松岡完「ワールドカップ! トライアングル」『世界』1998年12月号、293頁を参照して作成。
(註) カッコ内は準加盟国数をさす。



(出所) 松岡完、前掲、294頁。

図2 ワールドカップ代表選手が国外チームに在籍している割合の推移

表1 各出場国登録選手の所属リーグ人数 (2001年)

選手の所属するリーグ	出場国																			合計(人)													
	フランス	デンマーク	ウルグアイ	セネガル	スペイン	スロベニア	パラグアイ	南アフリカ	ブラジル	トルコ	コスタリカ	中国	韓国	ポルトガル	ポーランド	米	ドイツ	アイスランド	カメルーン		サウジアラビア	アルゼンチン	イングランド	スウェーデン	ナイジェリア	イタリヤ	クロアチア	メキシコ	エクアドル	日本	ロシア	ベルギー	チュニジア
プレミア・リーグ (ENG)	8	6	1		1		3		4	1	1		1	1	1	6	2	23	5		1	22	6	3	4		1	2		1		103	
セリエ A (ITA)	5	3	8		1	1		1	4	4	1		1	4	1						1	8		1	22	4			1	1	3	75	
ブンデスリーガ (GER)	2	1				4	1	2	1	1		1				6	3	20		1		1	1	1		7				4	1	59	
リーガ・エスパニョーラ (ESP)	3		5	22			1		3	1					2					3		7		1	1	1		3		4		57	
フランス・リーグ	5			21			1		2					1	2	1	1			9		2		2	3		1		1	2	2	56	
その他欧州のリーグ		13				16	2	10		13	1		1	15	13	2				3		1	12	10		8		1	1	17	16	3	158
中南米諸国のリーグ			9				18		13		20																19	21					103
その他				2				7			21					11			1	23				5							14		84
Jリーグ (JPN)						1							5																		19		25
Kリーグ (KOR)														16																			16

注：各国のリーグには下部リーグ（イングランド1部、セリエBなど）も含む
 (出所)：「朝日現代用語」知恵蔵」2003」2002年、朝日新聞社、1339頁。

ドカップ出場国の代表選手国外のクラブチームでプレーする割合が増加するとともに、その移籍金の高騰をもたらしている。図1は国際サッカー連盟加盟国数の推移をしめしたものであり、図2はおもに代表選手の国外クラブに在籍した割合をしめしている。

これらからわかるのは、グローバル化するサッカーの動態であり、かつグローバルなサッカー市場に南米、台頭著しいアフリカ勢の旧宗主国への移籍、さらには社会主義が崩壊した旧東欧から欧州への移動が顕著なことである [Maguire and Stead 1998: 59-73]。

この移籍市場の空前の規模拡大は、半世紀近く続いたヨーロッパ列強の「サッカー帝国主義」の時代が終わろうとしていることを予見させるだけではない [Crocchi and Ammirante 1999: 499-504]。メディアのほかにもこのグローバル化した世界で乱舞したのは、スポンサーであるスポーツウェア会社である。アディダスはドイツやフランスを、ナイキはブラジルとオランダを擁したように、大量宣伝とサッカー選手による製品販売力に競いあいに拍車をかけることとなったのである。

20世紀の大半をつうじてサッカーは、ナショナリズムのグロテスクなスペクタクルによって表象されるか、あるいは身体化された国民性によるひとつのカーニヴァルとして表象される可能性を与えることから、ナショナル・アイデンティティをもっともよく表現するスポーツとなったが、いまやそれも大衆向けの稼ぎ頭として見せ物産業と化しつつある。そのいっぽうで、選手生命にも「費消」が進行している。これまで平均12年であった選手生命も、いまでは平均6年に半減し、サッカー労働

佐藤 クリスティアン・カランブーのなかのフランス、フランスのなかのクリスティアン・カランブー者の生産性が日増しに高まり、日増しに寿命は縮っている [ガレアーノ 2002: 42-44] のもたしかである。「グローバル・ドリーム」のもとで深化する市場経済空間の拡大は、国境を越えた労働市場の接続によってさまざまな保障機能を失わせるだけでなく、移民労働者の参入を不可避とするグローバリゼーションの動態そのものと共鳴して引き起こされている [佐藤 2002: 202-251]。

3. フランス・ナショナリズムのパラドックス

5年前の98年フランス・ワールドカップ (La Coupe du Monde) におけるフランスの優勝は、国民スポーツが再結合の可能性とグローバル化の断面を如実に示すものとなった [Crolley and Hand 2002: 65-74]。それは、多民族統合の勝利と政治的に利用され、移民政策の難しさを覆い隠す効果をもったことである。

フランス代表チームは、移民系選手を主力とした混成チームである。しかも、移民の末裔でありながらフランスで育ち、フランス国籍を有した選手たちである。アルジェリア出身のジネディーヌ・ジタン、セネガル出身のパトリック・ヴィエラ、ガーナ出身のマルセル・デサイー、グアンドループ出身のリリアン・テュラム、旧ユーゴ出身のユーリ・ジョルカエフ、アルメニア出身のアレン・ボゴシアン、そしてニューカレドニア出身のクリスティアン・カランブーと枚挙にいとまがないほどである。くわえて、これら選手の多くは、フランスのクラブで育ったのちに、イタリアやイングランド、さらにはスペインのビッグクラブへ移籍して名を馳せた強者たちである。そして、かれらは強く否定される現地語と強制された宗主国言語の相克のなかで生まれ育ったからこそ、フランスという旧宗主国への高らかな自己表現を過剰なまでに発揮することで注目されるのである [Dauncey and Hare 2000: 331-347]。

ところで、フランスのサッカーの組織化は、混沌のなかからローカル化・土着化が生まれたといってもよい。それは19世紀に創設されたイギリスやドイツのサッカー連盟に比して遅れただけではない。イタリアと同様に、20世紀はじめに国内では異なるリーグが組織され、それぞれの国内試合を開催していたのである。こうしたなか、フランスサッカー連盟は1918年に創設され、それにともなってはじめての全国規模の大会がもうけられた。また国内リーグにいたっては1926年に組織され、1932年のプロ化によってようやくその強固な基盤が作られたのである。とはいえ、フランスの選手強化策が組織的に講じられたわけではない。早期の育成に重点を置

くシステムは1972年ジョルジュ・ブローヌ計画まで待たなければならない。全国的な育成センターが創設されたのち、1974年には国立フットボール技術センターが開設され、内外各地から若い有能な選手が集められたことで低迷を脱し、こんにちにいたるのである [前田 2002: 44-45]。

ことに、全国各地に創設された育成センターや国立フットボール技術センターは、世界に点在する旧植民地（現海外領土県）との密接な連携を不可避とした。このことはまぎれもなく、フランス社会全体の移民、人口動態や国籍取得増加とパラレルな関係で推移したといえる [Houlihan 1997: 113-137 ; Giraud 1999: 435-48]。じっさい、フランスにおける国籍取得者の比率は80年代以降急速に上昇し、90年代に入って約9万3千人のピークを記録し、フランス国家（すなわち、ジャコバン的平等と実態認識との乖離³⁾の根底的な変化を引き起す遠因ともなったのである。たしかに、植民地大国であったフランスは、戦後次々と海外植民地を失い、逆に国内に移民や外国人労働者を抱え、かれらの統合あるいは排除が深刻な社会問題として論じられてきた [Bourdieu 1999: 15-21]。

98年フランス大会での勝利は、第二次大戦のパリ解放以来フランス人の祝祭から排除された人びとを浮かび上がらせた。その反対に、フランス・ナショナリズムの高揚を願ういっぽうでフランスチームの混血性を人種差別的、民族差別的な言動で批判してきたナショナリストたち、そのなかでもジャン＝マリー・ルベン国民戦線党首は、「排除」されたのである。だが、たほうでは「サン・パピエ」と呼ばれる滞在許可証もない、居留を認められない亡命者、難民、不法滞在者などナショナルな枠組みから原理的に排除され、ワールドカップの熱狂から無縁な人びとがこの国際避難都市であるパリに結集していたことも忘れるわけにはいかない。

優勝が醸成したフランス国民の一体感や混血国家統合の夢も、現在混迷する移民政策のもとで政治家たちが口にしたのは、依然として国民国家に同化可能で統合可能な「良き」移民と、そうではない「歓迎されない人びと」 [ジェルーン 1994] を峻別するだけで、真の統合に結びつく施策を試みようとはしなかったのである。しかし、フランスチーム（今回同様に）は多民族構成の代表メンバーから編成され、民族的多様性なしには成り立えないフランスの社会状況を反映しているにもかかわらず、国民統合という名のもとでの排斥意識がフランス社会には依然として根深く

3) ジャコバン・イデオロギーは国民国家の一体性を保持せんがために民族的多様性を否定し、人種主義と共謀ないしは妥協をなすものであったから「外国人」と「フランス人」の二分法を越える「移民」の存在に注目せざるをえなくなったのである。90年国勢調査では177万人の国籍取得フランス人がおり、全人口の3.13%に達している [宮島 1999: 1-11]。

佐藤 クリステイアン・カランプーのなかのフランス、フランスのなかのクリステイアン・カランプー
存在している。なかでも、ルベンは「本当のフランス人選手」ではないという意味
合いを込めて「最近継ぎ足されたフランス人」と呼んで侮蔑して憚らないのである
[高柳 1994: 3-22]。

じじつ、ワールドカップ開催中に発表された調査では、フランス人の10人に4人
が人種偏見の持ち主であり、英雄には喝采を送り、残りは罵って良いとする風潮を
裏付ける結果をしめしたのである [ガレアーノ 1998: 7]。革命軍の行進曲であった
「ラ・マルセイエーズ」は、アフリカやアジア・太平洋ではかつての列強による植
民地支配の象徴にみえる。その国歌を代表チームの移民系選手が歌わないことを社
会問題視する人が多い。これまでも何回となく物議を醸す試合が繰り返されてきた。
そのなかでも、ニューカレドニア出身のカランプーがボールをもつたびに7万
人の観衆が一斉にブーイングを鳴らす光景に遭遇する。さらに、フランスが大差を
つけて試合の興味が失われると、ブーイングに呼応する人びとが確実に増えるので
ある。また、98年のワールドカップ優勝の1年後にフランス政府系機関が行なった
世論調査では、国民の約7割が「移民はフランス社会に溶け込む努力をしていない」
とした。また6割以上が「移民はフランス社会が統合するにはあまりにも異なる生
活様式を持っている」と回答し、移民系住民との共生に違和感を抱いている実態を
うかがわせている (『毎日新聞』2001年7月16日)。フランスは老化して、瑞々しい
生命力と創造力を失ってきているといるといわれるゆえんである。

2002年の本大会直前に行なわれたフランス大統領選挙第1回投票で極右政党＝国
民戦線のルペン党首が躍進し、「移民排斥」の社会的風潮が増殖されたことは記憶
に新しい。ルペンの躍進に驚嘆したジダンら6名の選手は、反人種差別団体の宣伝
ビデオに出演し、第2回投票ではルペンに投票しないように訴え、政治的発言には
慎重であったジダンさえも「国民戦線はフランスを体現する価値にそぐわない」と
声明を発表する始末となった。

さらに、本大会初戦で敗戦したセネガル戦では、民族的多様性を失ったときにフ
ランスサッカーがどうなるかを暗示するかのようであった。それは「アフリカのラ
イオン」と呼ばれるセネガル代表チームの選手たちの多くがフランスリーグでプレ
イしており、競技が終わればプレイヤーがその国籍よりもむしろ所属する「クラブ
チーム」へと変身する姿から、流動的で揺らぎを見せる「国家」の実体をあばきだ
したからである。しかも、陣野によれば、フランス国外のビッククラブでプレイす
る有名選手たちのフランス「代表」にたいして、セネガルの選手たちはフランス地
方都市の小さなクラブチームで国内リーグをささえるフランス「選抜」の功労者た

ちであったからこそ、フランスの敗北は「代表」の敗退であり、それを打ち破ったのは「選抜」セネガルであったがゆえに舞い上がったという [陣野 2002b]。これはまさに植民地主義とポスト・コロニアリズムとのせめぎあいを象徴する出来事であるだけでなく [陣野 2002c: 75-138]、地域主義に根ざしたフランス内部の覇権争い、いかにすれば「新しい市民権」としての「地域」復権の様相を呈するものであったといえる [宮島 2002: 1-13]。

その例証としてもうひとつ取り上げておきたいのは、2002年5月11日サッカーフランス杯の決勝戦、ロリアン（ブルターニュ地方）対バステリア（コルシカ）戦の開幕前に、フランスからの独立や自治をめぐる紛争が続くコルシカ島から応援に駆けつけたバステリアのファンたちがフランス国歌の演奏を口笛で妨害し、来賓席にいたシラク大統領が怒って一時退席する騒動についてである。シラク大統領は「共和国の価値が傷つけられ、容認できない」という態度を表明し、200年あまり続く独立派と反対派との対立を封じ込めようとしたのである。ここには地域圏（région）よりも広い自治権をもちながらも、「コルシカ人民（le peuple corse）」という概念が違憲とされ、「フランス人民（le peuple français）」の単数定冠詞を付け単一で一体のものとする事で分離主義を斥ける共和国理念が示されたからにはほかならない [Rey 2002: 8]。これに比して、コルシカ社会はむしろ主観的統合原理を拒否し、私的空間での人種的・宗教的多様性の容認はもとより、公共空間における多様性を求め、「地域」の復権をめざしているのである。歴史的にふりかえれば、コルシカ人民の政治的可能性をみたルソーは、その著『コルシカ憲法草案』のなかで、民衆の愛国的ヒロイズムを否定しながらも、自然のなかに埋め込まれた制度の力としてのナショナリズムを称賛し、ある種の理想をそこに投影したのである [森 2001: 306-355]。そののち、このルソーの思想がフランスの共和主義的ナショナリズムに利用されていくのは周知のとおりである。

西欧の伝統的用法である民族（nation）とは出生と共通文化を基礎としつつ、事実的な同質性に留まることなく、独自の共同体を形成する連帯意識と自決の志向をもった集団をさしているのはいうまでもない⁴⁾が、ナショナリズムが普遍主義の

(4) アメリカ社会科学で多用されるエスニシティ (ethnicity) と民族 (nation) とは重ならないのであり、支配的集団に比して文化的に異質性を根拠とするのがエスニシティである。エスニシティは場合によって連帯して平等やアイデンティティの権利を主張するが、自決の共同体の要求をもたない人びとのカテゴリーをさし、一般的には移民社会において有効性をもつ概念なのである [Touraine 1996: 15-41; 宮島 1993: 39-48]。したがって、コルシカやニューカレドニアのような社会に適合した概念ではないといえる。

佐藤 クリスティアン・カランプーのなかのフランス、フランスのなかのクリスティアン・カランプー
装いをまとってあらわれるとき、共和主義、言語同化主義あるいは多文化主義は陥
穽に陥るのである。それが排外意識の露骨な表出にほかならない。むしろ排外意識
の露骨な表出からヨーロッパの「共同体」の成員とは誰なのか。あるいは「ヨーロ
ッパ人」とはどのように定義されるのかをあらためて問われねばならないだろう[三
浦 2001a: 121-175]。

フランスがフランスであり続けるためには共和国原理（ジャコバン共和主義）を
死守しようとする「閉ざされた共和国」か、共和国の普遍主義がうみだした現実的
の不平等を、さまざまな差異を承認することで修復しようとする「開かれた共和国」
かというふたつの狭小なオプションの対立から脱する視座を必要とする。なぜなら、
ジャコバン共和国原理は植民地主義を担保しながら、国家的アイデンティティのな
かに自己正当化の論理、いかえれば「内部の他者」と「外部の脅威」の論理を内
包し、共和国の負の歴史とまともに向きあおうとしないからである [三浦 2001b:
37-60]。「文明化の使命」の名のもとに植民地獲得のために海外出兵し、人種主義
によって植民地化を正当化し [Ramonet 2001: 6-7]、革命100周年にパリで開かれ
た万国博覧会が世界各地の植民地人を展示する「人間動物園」であったことは知ら
れている。

4. フランス植民地主義とニューカレドニアのナショナル・アイ デンティティ

フランス大統領選挙を目前にひかえた2002年4月、かつての「植民地博物館」で
あったパリのアフリカ・オセアニア博物館に大きな横断幕が掲げられた。「かつて
は植民地にされ、いまは搾取の対象。もうたくさんだ！」と書いたのは、旧植民地
から不法就労として許可なく働くサンパピエ（移民）の人びとであった（『毎日新聞』
4月16日）。こうしたフランス社会の移民労働者の多くが旧植民地の出身者で占め
られていることから、植民地支配の歴史に内在した問題の根深さをみることがで
きよう。

19世紀から20世紀にかけての歴史は国民国家形成と民族主義、諸帝国の植民地支
配、「民族自決」と民族解放といったキーワードで語られてきた。こうした歴史的
文脈のなかで、構成される重要な要素のひとつが「自己」と「他者」認識である。
なかでも、フランスの植民地支配の歴史においては、「文明化」という言葉が常套
句のように使われ、その征服や支配を正当化するための統治イデオロギーとなって

いた。これは「進んだ」民族が「遅れた」民族を教化し、「遅れた」地に文明をもたらすという主張である。もちろん、この「文明化」にはフランス革命の理念やキリスト教の布教といった内容が含まれていることはいうまでもない。

この支配の論理はまた、人種差別を構造的に組み込むことで植民地主義と人種主義とが分かちがたくむすびつきイデオロギーの支柱をなした [杉本 1999: 88-114; ヤコノ 1998]。こんにち、フランスには海外県 (départements d'outre-mer=DOM) と海外領土 (territoires d'outre-mer=TOM) と呼ばれる地域があるが、これらもまた植民地帝国の残滓を引き継いで、独立せずにフランス領土として残ったところである [Aldrich and Connell 1992: 251-280]。一般的に、フランスへの同化の度合いが低いのは海外領土であり、独立への動きも顕著である。海外領土で独立を達成したのは、英仏共同統治下にあったニューヘブリデスが1980年にヴァヌアツ共和国となったくらいである。しかし、依然として多くの領土は経済的にはフランスに大きく依存する構造をもっており、独立への道程はけっして平坦ではないのが現実である。

フランスの海外領土拡張の歴史のなかで [Aldrich 1996: 68-88]、ニューカレドニアもまた他の植民地同様に、惨劇と対立が絶えず繰り返されたところである。1774年クックによってはじめて発見されてのち、1792年フランスの航海者ダントル・カストーが踏査したこの島は、1853年ナポレオン3世が流刑地とするまで顧みられることはなかった。入植が始まった1863年からは、フェイエ総督のもとで自由な植民化が始められ、先住民カナク人たちは土地の横領、保護区への収容と苛酷を窮める弾圧に遭遇したのである。「近代」の荒ぶる力のまえに、翻弄されたカナク人たちは幾度となく大規模な反撃を試みたが、ことごとくフランス軍によって鎮圧され、「特別行政制度」のもとで植民地の身分規定に従わされ、彼らの土地の大半が広大な田園の所有地に変貌していったのである。

第二次大戦前には、本島であるグラン・テール島の三分の二をフランス政府が支配し、四分の一を白人入植者が占有し、山地の11%にすぎない居留地にカナク人は囲い込まれたのである。フランスの植民地化は、ニッケル鉱山と商業に惹かれてのことであったとはいえ、土地の用益権と所有権をめぐる根深い対立の構図をいまもなお残している [Dahlem 1996: 25-34]。くわえて、カナク人への同化政策はさらに深刻な結末をもたらした。それは、みずからの文化を暴力的に否定されたことで、精神的抑圧感をつよく意識せざるをえないことである。伝統的儀礼や生活文化がフランスの「文明化」された慣習によって破壊され、見下されるなかで生きねばなら

佐藤 クリスティアン・カランブーのなかのフランス、フランスのなかのクリスティアン・カランブー
なかつたのである。もっとも大きな悲劇は、みづから拒否したい外来の文化をみ
づからがつよく抱かされたことで、以後こんにちまでカナク人たちは土地と自らの
文化回復（ブナンドの祭儀といった伝統的祭礼）に苦悩することとなった。こうし
たフランスによる植民地化は、人権宣言の精神を体現した法や文化の宣布という同
化主義的植民地政策の陥穽をしめすものであり、なによりもまず統治コストの高騰
を招く結果となった。植民地フランス化のための行政経費の負担は重く、しかも伝
統的な慣習と体制を破壊された先住民族の抵抗や反乱を余儀なくさせたのである
[Freyss 1995: 734-95]。

ところで、現代はことさらに記憶に値するものを創りだそうとする時代である。
貴重な文化遺産を世界遺産として登録し、重要な出来事や人物の記念碑をつぎつぎ
と建て、戦争や植民地化の記憶を国際的な政治課題にしようとする。このことは、
記憶の力の弱体化の裏返しでしかないのかもしれない。「歴史」と「記憶」との関
係性を問い返すことで、共和国による統合の虚構性をあばき、記憶の解体と新たな
構築の地ならしをすることこそがいま求められているといえよう。ここでは植民地
統治と文化的混淆の語り方の問題を、博物館や展覧会にかぎってとりあげてみたい。
なぜなら、B・アンダーソンは、『想像の共同体』改訂版のなかで想像のモードと
して3つの制度に注目しているからである [Anderson 1991: chap.10&11]。

それは植民地国家がみづからの支配地を想像するために、センサスと地図と博物
館を一体となって構築し、アイデンティティ・カテゴリーがセンサスを通じて人種
的分類に、地図も同様に、みづからの権力の拡大を正当化する手段となるだけでは
なく、遠隔地に「新しい（ニュー）」という奇妙な地名を冠することで相続人として、
あるいは「後継者」としての意味合いを与え、集団間の距離の大きさや勢力の帝国
内に再配置するために用いたのである。博物館は植民地体制が征服と同じくらい歴
史的に古いという愛着や植民地帝国の威光、さらには政治的相続物である「伝統」
の守護者として意味合いを色濃くしめす道具であった。しかも、これら3つの制度
は分かちがたく繋がりがあいながら「国民」としてのアイデンティティ形成をおし
すめようとしたのである。

博物館あるいは展覧会とは、裏返しになって展示される図書館であるとよくいわ
れるが、博物館の鍵は知識の根源的で独特な言説構造を可視的なものとする役割が
あるのにたいして、展覧会とは自己と他者のイメージを提示する特権的アリーナで
ある [Marcus 1991: 10-19] とされる。その典型をニューカレドニアに求めるとき、
なんとといっても1931年に開催されたパリ植民地博覧会がまずはじめに取り上げられ

ねばならないだろう。そこでは帝国のヒエラルキーが展示される権力のパノラマのように、軍隊がもたらす帝国の戦利品として獲得された事物が展示された。しかし、戦利品として獲得された事物は、現地の人びとの聖なるものの略奪による殺戮の形態にほかならなかったし、「他者」にかんする観念を明示するものとなった。そこで表象されたカナク文化は、オセアニア・パヴィリオン内に一棟の藁葺き小屋と空を突くように立てられたカーズによって示されるとともに、未開のリズムにあわせて太鼓を打ちながらダンスをするカナク人が楽天的な民族として語られた〔モルトン 2002: 34〕のである。あたかも、ここではニューカレドニアが原始社会のまま凍結されたかのようなステレオタイプが固定化され、単なる魅惑的なエキゾチズムの表現と土着文化の「科学的な」表現とが混同されて、「文明」と「野蛮」という二項対立の原理こそが文明化の原理であることを追認するものであった。

こうして植民地博覧会はフランスと植民地との差異を明確化させるために、両者をはっきりと分離して相互に影響を受けないように計画されたが、それが完全に成功をおさめたわけではなかった。これにたいして、混成文化のハイブリッド化の象徴として構想されたのが、1998年イタリアの建築家レンゾ・ピアノによって首都ヌメア近郊に建てられたチバウ文化センターであろう。ここにはカナク民族の文化の象徴であるカーズを建造物全体のモデルとし、文化の復興と推進を謳いながら征服された知の反乱と間文化的な翻訳や文化混淆といった新しい領域を押し拓こうとする展示戦略が目につくように配置されている〔Favole 2000: 9-14; 中村 2003: 164-166〕。そこでは民族誌的事物をアートとして展示することで異なる文化間でコミュニケーションするためのねらいが明示的に示されているのである。

〈カナク的なもの〉の視覚化をつうじて文化的自画像が国民を単位として意識的に追求されるとき、集合的アイデンティティは、特定のメッセージを発散させる公共建築やモニュメントに国民に刻み込みたい国家の記憶をすり込むことで成り立つものである〔ピータース 1996: 135-158〕。フランス文化の世界化戦略の一環として、2004年ルーヴル美術館横に新たに建設されるアフリカ・オセアニアを中心に集められたケ・ブランリイ美術館の基本コンセプトに引きつがれてゆくことに代わりはなかろう〔コバヤシ 1998: 27-40〕。これは、「ムルロア」以降フランスが太平洋の文化的な「復権」を通じて試みる帝國的な再結合政策の一環として読み取ることもできよう〔Maclellann and Chesneaux 1998: 75-94〕。

いずれにしても、植民地的近代性の象徴ともいえる建造物によってニューカレドニアの公共空間が構築されたが、この公共圏は植民地的近代のなかにある「普遍性」

佐藤 クリスティアン・カランプーのなかのフランス、フランスのなかのクリスティアン・カランプーを発見することで「他者」を再生産させる言説、すなわち依然として差異と不均衡発展の機能が隠された未完のプロジェクトなのである。現地社会の側の知的・文化的イニシアティヴを復権しようとするこの公共圏の言説には、独立の賛否にかかわらず植民地支配による規定性を強調しようとする側面があることだけは否めないのである。げんに、80年代カナクの独立運動指導者であったジャンマリー・チバウがカナクの「文化的伝統」に固執していたのは、ナショナル・アイデンティティの構築に発露を見いだしていたからにすぎないといえる [Bensa and Wittersheim 1998: 369-390; 中川2002: 193-234]。

5. クリスティアン・カランプーの「記憶」とアイデンティティ

サッカーの世界的な伝播は、植民地主義を展開する英仏列強を中心になされてきたが、それはサッカーを包括的に写し絵として伝播したのではなく、むしろ快楽的で遊戯的なイベントとして差しだされたサッカーに旧植民地地域の人びとは夢中になり、それぞれの土地の価値観や美学を新たにつけ加えていった。その複雑なサッカー伝播の旅路がこんにちのサッカーの広がりや定着をうみだしたのである [今福1999: 108-113]。

フランス海外領土であるニューカレドニアもまた、同様にサッカー受容の歴史は古く、サッカー・リーグが設立された1928年からこれまでに70年が経過し、数名の名選手を排出してきた。現在でもフランスを中心にヨーロッパで活躍している(2001年現在)のは、クリスティアン・カランプー (Christian Karembeu) のほかに、コルシカ在籍のマーク・カニャン (Marc Kanyan)、パリ・サンジェルマンに所属しているアントワヌ・コンブアー (Antoine Kombouare) やサンティエヌのジャック・ジマコ (Jacques Zimako) などが、カレドニア・フットボールリーグのリーフレット [*Ligue Calédonienne de Football*] の表紙を飾っていることから、現地では有名選手であることがわかる。現在では、約九千人のサッカー選手育成に努めており、各地でリーグ戦を展開してほか、オセアニアサッカー連盟 (ちなみに、ニューカレドニアは本連盟の正式メンバーではない) の構成国チームとの交流試合をおこなっている。

*Histoire du Football en Nouvelle-Calédonie*によれば、ニューカレドニア・リーグはフランスサッカー連盟の傘下であり、フランスカップに参加する資格を有するいっぽう、国内には三つの地域別リーグがあり、さらにそのもとに10のクラブチー

ムが存在する組織構成になっているが、いずれも遊戯的な楽しむためのサッカーにウェイトがおかれ、組織的な指導方法やコーチの不在から、オセアニアサッカー連盟に所属しているタヒチ・ナショナルチームよりも劣っているといわれている。

ところで、フランス・ナショナルチームのメンバーであったクリスティアン・カランブーは、1970年ニューカレドニアにあってもっとも独立への熱意が高いといわれるリーフ島で生まれ、地元のガイチャ・サッカーチームでプレーをしていたが、高校生になってから首都ヌメアに移り住む。そのとき、メキシコ・オリンピックでフランスチームのサッカー選手であったマーク・カミヨンに見いだされて彼は本格的なトレーニングを開始し、18歳でフランスのナントチーム（FC Nantes）に留学する。1989年から95年まで在籍したFCナントでは、当時資金不足から若手選手に切り替えてチーム建て直しに尽力していたこともあって、彼が頭角を現わし始めるのである。とくに、彼の武器は豊富な運動量と他を圧倒するスピードであり、中盤以降のボランチとして守備能力を発揮するとともに、サイドバックとしての器用さも高く評価されていた。

パリに移り住んでからはアパートで一人暮らしをしていた。この間、彼はサッカープレイヤーとしての国際的キャリア獲得をめざし、1991年から1992年のあいだにプロプレイヤーとして選抜され、その実績を確かなものにしていく。1995年にはまた、FCナントがフランスリーグ戦でチャンピオンになったが、そのとき彼は、はじめてオセアニア年間最優秀選手に選出されている。結局、FCナント在籍の5年間に130試合に出場し5得点をあげる活躍を見せたのち、1995年からイタリアプロリーグのサンプドリア・ジェンヌに移籍し、ここで2年間プレーをする。このイタリア移籍の間、オランダ名門チームにいたことのあるランド・ギュリットの家の下宿して選手としての心構えなどの教えを受けることで精神的に成長するきっかけをつかんだ。それだけでなく、62試合にも出場して6得点をマークし、はじめてヨーロッパ選手権代表にも選出されたのである。

その功あって、1998年スペインのレアル・マドリッドに移籍することになるのだが、しかし、このレアル・マドリッド移籍交渉がスムーズに進んだわけではない。そのいきさつを彼は地元紙 *L'ECHO* (1999 Mai, 5-12) で語っているが、移籍を希望したそのとき、ちょうどイタリア・プロリーグのサンプドリア・ジェンヌがバルセロナに売却される話が進んでいたために、在籍していたチームからの拘束を受けて半年間試合に出場することができなかったのである。実際、スペインのレアル・マドリッドに移籍し、活躍しはじめたのは97年後半の12月からであった。3年にわ

佐藤 クリステイアン・カランプーのなかのフランス、フランスのなかのクリステイアン・カランプーたるレアル・マドリッド在籍の間に2回のチャンピオンリーグ優勝を経験し、かつ数々の栄冠に輝いたと同時に、98年フランス・ワールドカップ代表に選ばれてもいる。しかし、3年間の在籍とその実績にもかかわらず、レアル・マドリッドでは新たに就任したコーチと反りが合わず、2000年イングランドのミドルスブラに移籍、2001年から現在までは、ギリシャのオリンピアコスに所属してプレーを続行している。

こうして、数々の栄冠を手にし、ヨーロッパを代表する選手までに成長したカランプーの背番号19をつけた「レ・ブルー」のユニフォーム姿を地元の人びとが羨望のまなざしでみているのも首肯できよう。じじつ、フランスがワールドカップ初優勝したときは、ニューカレドニアの人びとはテレビに釘づけになってニューヒーローの動静に注目していた。それはあたかもパリから遠く離れたヌメアで共有された遠隔地ナショナリズム (long-distance nationalism) のごとき、世界に離散したディアスポラ (マイノリティ) ネットワークのもとで人びとの歓声が響きわたったのである。スタッド・ドゥ・フランスとシャンゼリゼでの狂騒だけではなく、ニューカレドニアの首都ヌメアでも人びとは優勝の歓喜に酔い、「カランプー万歳」を連呼し、車のクラクションは一晩中鳴り止まらなかった。

いまやカランプーはニューカレドニア「国民」統合のシンボルとなった。ちょうどジダンが優勝後アルジェリアに凱旋し、多くの人びとの歓待をうけたのとどうように、カランプーもまた、1999年3月ニューカレドニアに、スロバキア生まれの世界的美人モデル、アドリアーナ・スクレナリコバ夫人を帯同させて帰国し、熱狂の渦にとりかこまれたのである (もとよりニューカレドニアの人びとがカランプーをヒーロー視するのはフランスで名を馳せ、高額のマネーを手に入れただけでなく、世界的モデルと結婚までしたことにある)。

ところで、いまのフランス・チームにはカランプーにかぎらず、旧植民地出身の選手が数多くおり、22名中14人が外国人で構成されている (ちなみに1部リーグでプレーしているのは全体の21%にもものぼる) ことが、チーム内で不協和音を生み出してしまうことも多々ある。しかし、こうしたチームにあってもカランプーはチームワークを重視することで同僚からも高い評価を得て、フランスチームのユニフォームを着ることを誇りにしているのである。

しかし、いっぼうでクリステイアン・カランプーはみずからの出自であるニューカレドニアを顕揚し、「非フランス人」宣言をしてはばからない。彼は、ニューカレドニアの民衆やニューカレドニアが抱える問題を知ってもらうためにフランス

「代表」に名を連ねているにすぎないと明言する。これは政治的ことばであることは明らかであろう。なぜなら、それは近代スポーツが内在する文化帝国主義的な側面からの批判であり、いまひとつはみずからの出自を問題にし、ニューカレドニアの「現在」の諸問題へ人びとを喚起するために自分の「過去」をことさら強調しようとする意図がある [陣野 1998a: 33-36]。

『朝日新聞』は2002年3月から夕刊で「W杯紀行」の連載を開始するが、その第1回目（3月1日）が、国末憲人記者の手になるカランブー論であった。そのなかでも言及されているが、カランブーの大祖父ウィリー・カランブーが1931年のパリ植民地博覧会に「食人種」として動物園で見せ物にされ、檻のなかで生肉を食べ、裸で踊ることを強いられたことが自らの記憶からは決して消し去ることはないと言っている。『食人種』の著者ディディエ・デナックス [Daeninckx 2002] は、その本のなかでカランブーとの対話を収録しているが、植民地博覧会で食人種としてニューカレドニアの人びとが展示対象とされたことで受ける精神的な苦痛は測り知れないものがある [Velot 1996: 7-12; Dauohine 1998]。

かれは「ニューカレドニア出身」ではなく、「ニューカレドニア人」としてつねに現在性を刻み込んだ宣言を発することのできる者たちがサッカーをめぐっても現われることに期待を寄せて、みずからその水先案内人をもって行っているのである [陣野 1998a: 36]。いいかえれば、ディアスポラ的アイデンティティ形成の弁証法としてポール・ギルロイが多用する「どこから来たかじゃねえんだよ、どこにいるかなんだ」の精神と共通したメッセージにほかならない。それは文化的な支配の威力をそぐためにはなによりもまず文化的自律性の確保が必要であり、アフリカの作家、ティオンゴがいうところの「精神の脱植民地化」(the decolonization of the mind) [Thiongo 1988] からはじめなければならないが、ニューカレドニアの次世代がカランブーにどのように続くことになるのか興味がつきない。

6. おわりに——オセアニア・ポストコロニアリズムの模索

スポーツに融和の力があることは、さきのワールドカップで日韓が世界にしめしえた功績のひとつであったかもしれない。しかし、その後、ヨーロッパ選手権予選スロバキア対イングランド戦あるいはトルコ対ギリシャ戦ではサポーターによる人種差別発言や騒動で、融和が「奇跡」に近いことであるという認識がヨーロッパに広がりつつある。ときあたかも、ヨーロッパが拡大EUに押し広がり、2004年には

佐藤 クリスティアン・カランプーのなかのフランス、フランスのなかのクリスティアン・カランプー

25ヶ国、4億6千万人の人口を抱える巨大地域に変貌しようとしている。それはまるでヨーロッパサッカー連盟加盟の51ヶ国の規模に匹敵するかのようである。

いまや「国家」や「民族」という概念装置では把握しきれない状況が登場しつつある。現実には「国家」や「民族」を越えて進行しているにもかかわらず、求心力を旨とする国家や民族といういわば在来概念に依拠しながら、新たな意味を付与しようとする狭小な議論が多い。現代世界の構造的な変容を把握することはできないのは明らかであろう。このことは、地域研究の方法論にも妥当する。それは「地域」を認識する認識主体の視角によって形骸化され、可視化されるかぎり、排他性や先後関係の単位としてしめされるだけである。「地域」としての空間を地理的な実在と結びつけた空間認識、かくたる歴史空間の地政文化的な視角で構成される新たな「地域」像がこんごさまざまな論議を可能にしてくれるのである。その意味からも、あらためて「ヨーロッパ」とはなにかを辺境社会から問い直す作業が急務であるように思える（佐藤 2003: 453-482）。

また、グローバル化と土着化との相互連関に着目してスポーツを解説するとき、そこに内在する植民地主義の継続性と脱化の道筋が模索されねばならない。その視角こそがポストコロニアリズムにほかならないのである。それは植民地体制が作り上げた枠組みがいまも残存し、それに規定されながらこれまで常識とされてきた知の体系、知の枠組みを解体・再構築しようするものだからである。そこで形成されるアイデンティティは、一元的なものではなく、複合的・関係的なものとならざるをえないのである。

本稿ではかくのごとく、サッカー批評をめぐる素人談義を展開してきたわけではなく、サッカーを手がかりとして世界の動態をみてきた。2006年のドイツ大会の各大陸別出場枠が2002年末に決定され、これまでなかったオセアニア枠1が新たに確定したとする朗報が舞い込んできた。オセアニア枠とは、1966年に設立されたオセアニアサッカー連盟に加盟する11ヶ国のなかから選出されるものであるが、オセアニアネーションズカップではつねにオーストラリアとニュージーランドが優勝を飾ってきていることで出場国が限定されるという批判もある。しかし、このリーグは5チームずつ2グループに分かれるセントラル方式でリーグ戦を行ない、そしてグループのトップチーム同士がホーム・アンド・ウェー方式で代表決定戦を行ない、その勝者が南米地区5位とプレーオフを行なうという世界でいちばん広大な予選を戦わねばならない地域である。ここに参加しているのはヴァヌアツ、タヒチといった国々である。今後ワールドカップ初出場めざしてフレンチ・ポリネシア地域メン

バーがどのような戦いぶりをして、第2のカランブーを育成してくるだろうかという期待も膨らむ。とくに、タヒチは2000年6月、5ヶ国で争われたポリネシアカップで圧倒し、優勝を飾って上り調子なのである。最近監督も交替し、フランス人パトリック・ジャクメの指揮のもとで、90年代はじめから頭角を現わしはじめたパスカル・バイルア兄弟が活躍する余地は十分に予想される。また、フランスサッカー協会は海外領土のリーグ戦「海外領土クラブカップ」を開催し、決勝戦をフランス本土で行なうようになったが、フランスと南太平洋との脱植民地化の過程には、依然として「民族」の記憶がまわりついていくことになる。なぜなら、フランス本国と海外領土との試合交流は道は開かれたとはいえ、フランス並みの若手育成のための資金援助によって、フランスに流入すればするほど、本国に対するかつての「怨念」が蘇らざるを得ないからである [Moins 2002a; 2002b]。

こうしたことから、カランブーのアイデンティティを探る試みは、まったく無意味ではなからう。それはニューカレドニアとフランスとの関係だけではなく、歴史に刻印された植民地主義をめぐる思索の重要性をあらためて再確認させるからである。ともあれ、植民地主義の産物であるサッカーをめぐる政治学的考察が、今後より深化するための一道標になれば、本稿のねらいは完遂することになる。最後に、そのことを願いながら本稿を締め括るとしよう (了)。

謝 辞

本研究は1999 (平成11) 年度から2002 (平成13) 年度の3カ年間にわたる日本学術振興会科学研究費補助金国際学術調査 (「極小国家の「国家的アイデンティティ」の社会的・経済的・文化的基盤に関する研究」課題番号基盤研究 (A) (2) 11691069) による研究成果の一部である。現地調査にあたっては、ニューカレドニア・サッカー協会名誉会長 Guy Fouques氏、Les Nouvelles Calédoniennes 新聞社 Raymond Busnel 記者、L'ECHO calédonien新聞社の S. Mekaël 記者、現地在住の山田眞治さんらの協力を得た。快くインタビューに応じてくださったみなさんに感謝の意を表したい。また、サッカー批評に卓越し、日本におけるクリスティアン・カランブー研究で知られる明治大学の陣野俊史氏から貴重なアドバイスを頂戴した。あらためて御礼を申し上げる。なお、文責は筆者のみに帰することはいうまでもない。

参考文献

- Aldrich, R. and J. Connel
1992 *France's Overseas Frontier*. Cambridge: U.P. Cambridge.

佐藤 クリステイアン・カランプーのなかのフランス、フランスのなかのクリステイアン・カランプー

- Aldrich, R.
1996 *Greater France*. Press. Malaysia: Macmillan.
- Anderson, B.
1991 *Imagined Communities*. Revised Edition. London, N.Y.: Verso.
- Bensa, A. and E. Wittersheim
1998 Nationalism and Interdependence: The Political Thought of Jean-Marie Tjibaou, *The Contemporary Pacific* 10(2): 369-390.
- Bourdieu, P.
1999 The State, Economics and Sport, In H. Dauncey and G. Hare, eds., *France and The 1998 World Cup*. London: Frank Cass.
- Croci, O. and J. Ammirante
1999 Soccer in the Age of Globalization, *Peace Review* 11(4): 499-504.
- Crolley, L. and D. Hand
2002 *Football, Europe and the Press*. London: Frank Cass.
- Daeninckx, D.
2002 *Cannibale*. Paris: Magnard.
- Dahlem, J.
1996 *Nouvelle-Calédonie pays Kanak*. Paris: L'Harmattan.
- Darby, P.
2002 *Africa, Football and FIFA*. London: Frank Cass.
- Dauncey, H. and G. Hare
2000 World Cup France'98, *International Review for the Sociology of Sport* 35(3): 331-347.
- Dauphine, J.
1998 *Canaques de la Nouvelle-Calédonie a Paris en 1931: De la case au Zoo*. Paris: L'Harmattan.
- Dimeo, P.
2002 Colonial Bodies, Colonial Sport, *The International Journal of the History of Sport* 19(1): 72-90.
- Freyss, J.
1995 *Économie Assisté et Changement Social en Nouvelle-Calédonie*. Paris: Presses Universitaires de France. I.E.D.E.S.
- Favole, A.
2000 Le Centre Culturel Tjibaou. *Études Mélanésiennes* (31).
- ガレアーノ, E.
1998 「1998年のワールドカップ」飯島みどり訳『みすず』(452): 2-7.
2002 「W杯エッセイ: ユニホーム」飯島みどり訳『世界』8月号: 42-44.
- Giraud, M.
1999 Les Migrations Guadeloupéenne et Martiniquaise en France Métropolitaine, *Review* 22(4): 435-448.
- Houlihan, B.
1997 Sport, National Identity and Public Policy, *Nations and Nationalism* 3(1): 113-137.
- 今福龍太
1997 『スポーツの汀』紀伊国屋書店。
1999 「サッカー批評・原論: 身体帝国主義の流れに抗して」『サッカー批評』(3): 108-113.
- ジェルーン, T.
1994 「歓迎されない人びと」高橋治男・相磯佳正訳 晶文社。
- 陣野俊史
1998a 「サッカー・部族・共同体」『現代思想』3月号: 24-42。
1998b 「テュラムが突き刺した夜」『現代思想』9月号: 15-27。
2002 「ワールドカップ2002(上)」『ふらんす』4月号: 90-93。
2002a 「セネガルから見たW杯」『朝日新聞』(7月3日夕刊)
2002b 『フットボール都市論』青土社。

- キッシンジャー, H.
2002 「地球を読む」『読売新聞』（7月8日）。
- 小坂井敏晶
2002 『民族という虚構』東京大学出版会。
- コバヤシ, K.
1998 「ポストコロニアルの状況から」『みすず』（452）: 27-40。
- Maclellann, N. and J. Chesneaux
1998 *After Moruroa*. Melbourne: Ocean Press.
- 前田和明
2002 『王者交代』NHK出版。
- Maguire, J. and D. Stead
1998 Border Crossings, *International Review for the Sociology of Sport* 33(1): 59-73.
- Marcus, J.
1991 Postmodernity and the Museum, *Postmodern Critical Theorizing*. pp10-19.
- 三浦信孝
2001a 「フランスから見た欧州統合の諸問題」『紀要：文学科』（中央大学）（88）: 121-175。
2001b 「問われるジャコバン共和国」中央大学人文科学研究部編『民族問題とアイデンティティ』中央大学出版部。
- 宮島喬
1993 「ヨーロッパにおける「民族」の問題の新たな次元」樺山絢一・長尾龍一編『ヨーロッパのアイデンティティ』新世社。
1999 「フランス移民研究における「エスニシティ」」『応用社会学研究』（41）: 1-11。
2002 「新しい市民権」と地域市民権『応用社会学研究』（44）: 1-13。
- 森政稔
2001 「ナショナリズムと政治理論」山脇直司・内田隆三・森政稔・米谷匡史編『ネイションの軌跡』新世社。
- Moins, J.P.
2002a <http://www.sportsnavi.com/topics/Article/ZZZ6FIEJIPC.html>
2002b <http://sportsnavi.yahoo.co.jp/topics/Article/zzz2HIXJIPC.html>
- モルトン, P.
2002 『パリ植民地博覧会』長谷川章訳 ブリュッケ（星雲社）。
- 向山恭一
2002 「時評思想」『図書新聞』（7月20日）。
- 中川理
2002 「植民地状況における行為」春日直樹編『オセアニア・ポストコロニアル』国際書院, 193-234.
- 中村純子
2003 「観光文化としての先住民家屋」橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化』世界思想社, 148-170.
- ピーターズ, N.
1996 「多文化主義と博物館」日本記号学会編『多文化主義の記号論』東海大学出版会, 135-158.
- Ramonet, I.
2001 Cinq siècles de colonialisme. Manière de voir 58. *Polémiques sur l'histoire coloniale*. (Le Monde Diplomatique) Paris.
- Rey, D.
2002 Football et Nationalisme en Corse. *Le Monde Diplomatique* (581): 8.
- ロウ, W/V・シェリング
1999 『記憶と近代』澤田眞治・向山恭一訳 現代企画室。
- 佐藤幸男
2002 「NGOと国際協力の政治学」西川潤・佐藤幸男編『NPO/NGOと国際協力』ミネルヴァ書房, 202-251。
2003 「地中海世界と拡大EUのゆくえ」『法学新報』110 (3・4): 453-482。

- 佐藤 クリステイアン・カランブーのなかのフランス、フランスのなかのクリステイアン・カランブー
- 杉本淑彦
1999 「フランスにおける帝国意識の形成」北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』世界思想社。
- 高柳先男
1994 「ナショナリズム「問題」の位相」日本政治学会編『ナショナリズムの現在 戦後日本の政治』岩波書店, 3-22。
- Thiongo, N.
1988 *Decolonising the Mind*. Kenya; Heineman.
- Tjibaou, J.
1998 *Nganjla Tjibaou Centre Culturel*. Noumea.
- Touraine, A.
1996 Les Nationalisme contre la Nation, *L'Année Sociologique* 46(1): 15-41.
- Velot, J.
1996 L'Exposition Coloniale Paris: 1931. *MWA VÉE*. 13: 7-12.
- ヴァール, A.
2002 『サッカーの歴史』大住喜之監修・遠藤ゆかり訳 創元社。
- Wright, G.
1999 The Impact of Globalisation, *New Political Economy* 4(2): 268-273.
- ヤコノ, X.
1998 『フランス植民地帝国の歴史』平野千果子訳 白水社。